

良心の碑

安中を訪ねる旅

9月26日(土)・27日(日)



▲安中教会にて

名ツアーコンダクター

旅行の企画・運営は片桐陽さん。有田屋第七代当主・湯浅康毅氏も観光ボランティア・星野富男氏も片桐さんの長年の友人。湯浅さん、星野さん、安中教会との事前打ち合わせ、ホテル予約、夕食・昼食会場の手配、自家用車で送迎など、片桐さんには大変お世話になりました。

上毛三山

赤城山・妙義山・榛名山を上毛三山というのですが、その名を冠した銘酒が夕食で振る舞われました。「はやくこちに回してくれ」と、美味しい酒を楽しみました。



湯浅治郎という人物

有田屋第三代・湯浅治郎(1850～1932)は新島襄の志に共鳴して、安中教会設立に尽力するとともに、新島襄没後、有田屋の経営を子息に譲り、京都に引っ越して同志

▲湯浅康毅氏

社の経営を支えました。現当主・湯浅康毅氏は湯浅治郎を「学び続ける人・学んだものを社会に返す人・人の志を支える人」と説明してくださいました。

バリトン

安中教会の主日礼拝に出席しました。朝日研一郎牧師の力強い説教とバリトンの美声に感動しました。



▲龍昌寺(新島先生が初めて説教した所)
(文責:支倉清 写真:江澤香・多田直彦)

10月例会

日時 10月13日(火) 14時から
会場 東京サテライト・キャンパス
内容 研究発表会

発表者 江澤 香氏

テーマ 「昌平賢友と新島襄」

係分担 司会(片桐陽) 聖書(支倉清)
受付(小林悦美・夏原知子)
写真(木原康博)

窓 1874年11月26日、新島襄は横浜港に帰着した。函館から密出国して以来、10年以上の歳月が経っていた。2日後の11月28日未明、東京・板橋で人力車3台を借り上げ、安中を目指して20数時間走り続け、深夜零時ごろに到着した。3台のうち2台はアメリカから持ち帰った荷物運搬用だったという。当時、鉄道が開通していたのは東京と横浜の間だけだった。今なら東京駅から高崎駅までは新幹線で1時間弱、タクシーだと3時間半ほどだそうで、

新島の人力車のスピードも結構なものだった。

新島は待ちわびていた祖父や両親、姉たちとの再会を果たした。異国の情報に飢えていた土地の人たちも大勢集まってきた。新島の帰郷は群馬の田舎にとってビッグニュースだった。ただ、新島は神田の安中藩江戸屋敷で生まれ、育った。安中への旅は「帰郷」ではなく、「訪問」というのが正確な表現であろう。では、新島は生涯、何度、安中やその近隣を「訪問」したのであろうか。

群馬・新島学園の同窓会報「根柢」第45号に「新島襄先生の安中來訪について」という貴重な報告が掲載されている。そこから引用させていただく。

1861年3月に安中藩主板倉勝殷に従って安中を訪れたのが最初の訪問で、アメリカからの帰国直後は2度目だった(滞在27日間)。3度目は1878年3月で、有田屋の湯浅治郎が創設した私設図書館「便覧舎」で講演するなどした(滞在7日間)。その後、安中教会の新築会堂発会式(1883年5月)や、静養

のため前橋経由で伊香保温泉訪問(1888年7月)などの記録があり、1889年11月に前橋を訪れたものの、体調を崩し、大磯の百足屋へと移ったのが、最後となった。新島が亡くなったのは翌年1月23日である。

報告によると、新島が安中を訪問したのは計8回で滞在日数は計60日。伊香保温泉と前橋の滞在(計90日)を加えると、滞在日数は総計で150日となるそうだ。(福岡 幸)